

『桃花源記』の「外人」について

中国学科 春日井幹三

中国では初中になると古文を学び始める。1年前期は『論語』から始まることを(私が小朋友たちと一緒に学んでいることも)前に報告したが、後期の最初は陶淵明の『桃花源記』である。漁師が谷川を溯っていくと、桃の林が山の水源まで続いていて、洞穴を抜けると別世界、つまり桃源郷があったという、日本でも漢文の時間で習う有名な話である。

ところで、きわめて短い『桃花源記』の本文の中に、「外人」ということばが3回出てくる。最初は、村中を往来し、耕作している人々の服装がみな「外人」のようで、老人も子供もみな楽しげであるという、桃源郷に迷いこんだ漁師の目からの描写である。

其中往来種作、男女衣着、悉如外人、黄髮垂髻、并怡然自樂。(註1)

其の中に往き来して種(タマ)き作(カ)ヤせるもの、男女の衣著(イヤク)は悉く外人の如く、黄なる髪せるも髻(ムカ)ガミを垂れたるも、並(ト)に怡然(イゼン)として自(ミ)ずから楽しみ。(註2)

第2は、村人が漁師に、秦の時の戦乱を避けてこの絶境に来てから、「外人」と疎遠になってしまったと説明する場面。第3は、漁師が帰る時に、村人が、「外人」に話すまでもないですよ、とやんわりと禁止する場面。いずれも村人の発言であるから、「外人」とは「外の人」、つまり桃源郷の外の俗世界の人を指すことは明らかである。

それでは、第1の「外人」は誰であろうか。これも同じだというのが老師の説明である。なるほど《語文》教科書にも、第1の「外人」のところに注がついていて、「〔外人〕桃花源以外の世人。下同。」とある。これがどうも腑に落ちない。日本ではふつう、「そこに行き来し、耕作する男女の服装は、みな漁人とはちがうよその世界の人」のようで、黄ばんだ髪の老人も垂れ髪の童児も、みな心から楽しげにしている。」(註3)と解している。

納得できないのは、ここは漁師の視点から描写しているところであって、そのとき自分のことを外人と呼ぶだろうか、という疑問がまず浮ぶからである。やっかいなことに、桃源郷の村人が着ている衣装について、中国的解釈では漁師と同じとなり、日本的解釈では漁師とは異なるという正反対の結論になる。

日本にも中国式の解釈をする人もいて、陶淵明の研究者として著名な一海氏は、40数年前に既に、「ここも他の二例と同じく桃源郷の住民にとって外部の人の意であり、漁人と同じようなごくふつうの服装と解すべきである。」(註4)と述べられているが、数年前には、3つの理由を挙げて詳しく論じておられる。理由の第1は、「外人」という漢語には外国人や異人という意味はなく、ある地域・社会から見て外の人を指すこと、第2は、3度とも内外を特定する語と対応して用いられていること、第3は、衣食住についての描写がみな普通の中国の農村風景であることで、「ここに落ちていてから五百年を経ているとはいえ、子供の髪型に変化がないように、そう特異な服装をしているはずがない。」(註5)

この3つの理由はかなり強力で、理性は説得されてしまいそうになるのだが、感性は納得しない。そこで及ばずながら反論を試みてみよう。第1点については、「外人」を外国人と解する必要はない、ということである。氏の言われるように、ある社会から見て外の人

というのが正しく、漁師から見てよその世界の人と解しても矛盾は生じない。第2点については、ここでは、「其中」の「中」と「外人」の「外」が対応しているという指摘であるが、この直前は、漁師が眼にした桃源郷の美しい風景やのどかな情景を描写しているのであるから、「其中」はそういう具体的な桃源郷の風景の中で、と取るべきであって、抽象的な桃源郷一般を指しているのではない。第3点については、よその世界の人と解しても、「特異な服装をしてい」なければならない、ということにはならない、ことを指摘したい。「外国人のような特異な服装」という通説に反論される趣旨は理解できるけれども、そこから直ちに、「外人」は、「外人」であることを自覚した漁師本人を含めた桃源郷外の人である、というのは論理に飛躍があると思う。だいたい自分とまったく同じ服装をしているならば、漁師がそれを意識することもないであろう。迷いこんだ世界が、自分の世界とはなんとなく違わず、服装も少し違わず、老人や子供ももっと楽しげだぞ、というのでないと私の感性は納得しないのである。

もっと良い説明はできないかと考えているうちに、ふと簡単な事実気がついた。そもそも『桃花源記』は本来単独の作品ではなく、『桃花源詩 并記』の一部、つまり詩の前書きにすぎない。前書きがあまりにも有名になったために、単独で読まれるようになったのである。それならば、この部分は『桃花源詩』ではどううたわれているのであろうか。

俎豆猶古法 俎豆(ウヅ)は猶お古法にして
衣装無新製 衣装には新製なし
童孺縦行歌 童孺(ドウジュ) 縦(ホ)しいままに行くゆく歌い
斑白歡游詣 斑白(ハシバク) 歡(タカ)しみつつ遊び詣(ウケ)る

台やたかつきのお供えものは今も昔のしきたりに従い、衣装も新しい型のものはつ
くらない。子供たちは気のむくままに歩きながら歌をうたい、ごましお頭の老人た
ちもたのしげに好きな家を訪ねて歩く。(註6)

つまり、衣装には新しい型のものがなかったのである。そうしてそう認識できた漁師は新しい型の衣装を着ていたか、見慣れていたのである。漁師は古い時代の衣装を着た村人たちを見て、よその世界の人のように感じたのである。桃源郷の人の衣装が外部世界の人のそれと同じであるという主張は明らかに成り立たない。QED。

書き進むうちに、陶淵明が杯を片手に、「『書を読むことを好めども、甚だしくは解することを求めず』だよ、きみ。」と囁く声が聞こえたような気がした。もうやめよう。

(註1) 九年義務教育三年制初級中学教科書『語文 第二冊』 人民教育出版社 2000年 p119。

(註2) 一海知義注『陶淵明』 中国詩人選集 岩波書店 昭和33年 p141~142。

(註3) 沼口勝 『桃花源記の謎を解く』 日本放送出版協会 2001年 p47~48。

(註4) 一海 昭33 p143~144。

(註5) 一海知義『陶淵明 -虚構の詩人-』 岩波新書 岩波書店 1997年 p20。

(註6) 一海 昭33 p147~149。